街道とまちづくり

第59回 石見銀山街道

火山からの恵みが息づくまちで「共創」のまちづくりを目指して

大田市長（島根県） 楫野弘和

自然の恵みと交流から生まれた多彩な遺産に出合えるまち

世界遺産「石見銀山遺跡とその文化的景観」で知られる大田市は、島根県のほぼ中央部に位置し、県庁所在地である松江市から西へ約70㎞の距離にあり、面積435・34㎢、人口約3万2000人の地方都市である。本市は平成17（2005）年10月1日、1市2町が合併して誕生した。

本市の北側は日本海に接し、日本海に注ぐ小河川が形成した小規模な平野・平地部に、市街地や集落などが集中する。市の南東側には標高1126mの三瓶山、南西側には標高808mの大江高山があり、小河川の多くは三瓶山、大江高山を中心とした山地部を源とする。

三瓶山麓では縄文時代に起こった噴火の火砕流などにより、当時の自然環境が遺され、現在国内最大規模の埋没林を観察することができる。

また、本市西部に位置する仁摩町や温泉津町は、水系を中心とした生活の痕跡が古くから残る一方で、近世以降、石見銀山の開発に伴い、山間部での開発が活発に行われ、現在でもさまざまな鉱物資源の採掘が各所で行われている。

こうした火山活動の恵みを利用した歴史が息づくまちとして、令和2（2020）年度には「石見の火山が伝える悠久の歴史」が日本遺産として認定されている。

銀山街道の起点、大森代官所跡。代官所周辺には、多くの役所関連遺構が残る。かつては代官所から瀬戸内海まで3泊4日の行程で銀が輸送されていた

日本海を望む鞆ケ浦の港。鞆ケ浦は銀山発見直後から銀鉱石の搬出港として利用されていたと伝わる

歴史街道としての石見銀山街道と世界遺産としての石見銀山街道

石見銀山街道とは本来、日本海沿いの港湾集落―温泉津―と石見銀山を結ぶ「温泉津ルート」および、瀬戸内海と石見銀山を結ぶ「尾道ルート」を併せた、延長約130㎞の交通路を指す。

江戸時代、毎年旧暦の11月に尾道まで運ばれた石見の銀は、瀬戸内海の海運により畿内へ運ばれ、一定の品位に加工され各地で流通していた。

一方で、世界遺産としての石見銀山街道は、戦国時代に日本海を経由して銀鉱石を搬出した、石見銀山から仁摩町の港町―鞆ケ浦―に抜ける「鞆ケ浦道」と、石見銀山から、戦国武将毛利元就が整備を行った港町―沖泊―および隣接する温泉津に至る「温泉津・沖泊道」の二つの街道から構成されている。

大田市内において、現在これらの旧街道はその役割を終え、わずかに往時の面影を残すところであるが、近年では自然を体験できるトレッキングコースとして、石見銀山を訪れる外国人から注目を浴びている。

共創のまちづくりを目指して

本年度には市内のほぼ全域において、東西に走る山陰自動車道が開通する予定であり、また、本市と広島県を結ぶ国道375号もバイパス化が進んでいる。

交通網の利便性が向上することで、県央に位置しているという本市の地理的特性が最大限発揮できることを期待しており、コロナ禍で落ち込んだ観光客数の回復や大田市産農林水産資源の販路拡大、各種災害・救急対応の迅速化、U・Iターン者の獲得を見込んでいる。

銀山街道の起点である大森地区においては、本年度に地区内八つの事業者による「石見銀山大田・ひとまちづくり協同組合」が創立された。この協同組合は地域特性を生かしたひと・まちづくりを展開し、地域外からの若者の取り込み、経済の活性化などに資する役割が期待されている。

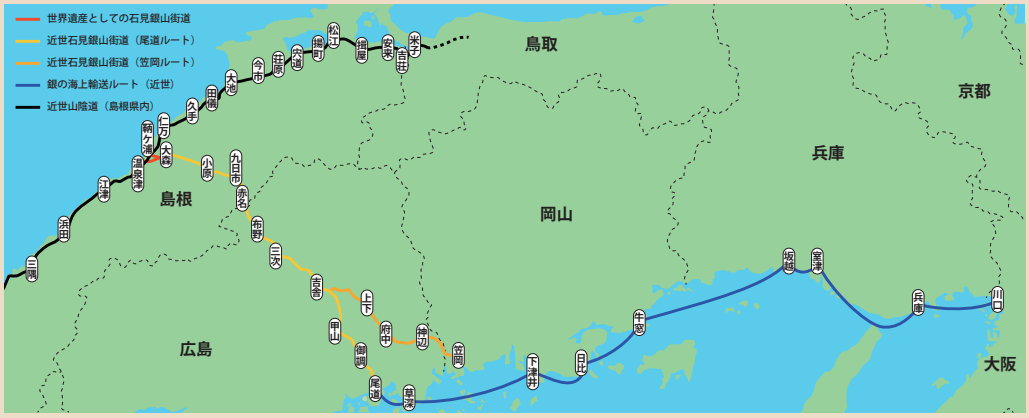
令和9（2027）年は石見銀山が発見されてから500年の節目となる。銀山発見以降、街道や海路を通じてさまざまな人の往来があり、そうした人々の交流の結果として現在の大田市が形成されている。令和という新たな時代を迎え、本市に関わる全ての人が、共に考え、行動するような「共創」のまちづくりをいっそう進めていきたい。

一口メモ　石見銀山街道

銀山街道と大田市の近代化

江戸から明治へと時代が変わる中で、石見銀山街道「温泉津・沖泊道」は新たに国道9号としての役割を担うこととなる。ただし、その期間は短命であり、明治9（1876）年の国道制定後、明治19（1886）年には改修計画が放棄され、「温泉津・沖泊道」を大きく迂回する形で新たな国道9号が制定された。

改修計画が放棄された理由の一つは、施工に当たり莫大な工事費がかかることとされており、新時代を迎えた住民の期待を考えると悄然の感がある。一方で、計画が放棄されたことにより、街道沿いに自然や歴史的環境が多く残され、世界遺産登録の一助になったことは疑うべくもない。



企画協力：全国街道交流会議「街道交流首長会」